

旧正月の終わった時期を見計らってモルディブに行つた。実は今回の海外出張で私の訪問国数は100カ国になった。シンガポールから4時間あまりで行けるモルディブには島の数だけで1190カ所もある。その中でも開発されたリゾートが80カ所以上もあるが、どこも満杯で直前の予約は難しくキャンセル待ちでやっととれた。

今回の滞在先はモルディブのなかでも中ぐらいの規模で、飛行場のあるマアレ空港から1時間ほど高速艇で南に行つた所で、縦が500メートルで横幅が120メートルの島であった。島のリゾート施設には125人ばかりが働いているが、1日あたりの宿泊人数はたった230人である。

到着した波止場では大小の綺麗な熱帯の魚が出迎えてくれるので地球上にまだこんなところが存在するのかと驚いた。このような素晴らしい自然がインド洋の環礁の無数の島嶼に残っているのだが、気になったのはどのように島の環境を保全しているのかである。

モルディブの最大の問題は水没問題であるが、この問題はまだ猶予がある。喫緊の問題は水資源の確保と再生可能エネルギー導入である。モルディブでは温暖化の影響を軽減するための再生可能エネルギーを導入するプログラムを実施していると聞いた。現状のエネルギーは化石燃料にほぼ全面的に依存しており、これらの関連費用にGD Pの約36%を費やしているという。

AROUND THE WORLD

山師の手帳 第28回 中村繁夫

モルディブの海水淡水化プロジェクト

こうした背景から、アジア開発銀行（ADB）、世界銀行（IBRD）などから再生可能エネルギーを導入するプログラムに必要な資金を得ているようだ。プログラムは都市部の島と離島、計40で再生可能エネルギーを導入する計画だが、ADBとIBRDはより多くの資金が基金や投資家などから得られるように、このプログラムを拡大しつつあるという。

海水淡水化の鍵を握る日本のチタン

次に水の問題である。水上バンガローや島内のロッジやレストランやホテル棟の設備は立派なもので、上水道も下水道も完備しているのである。元々は無人島だったが、島をゼロからここまで開発して、世界の観光客を誘致するのにかなりの投資が必要だったと思われた。

水がどのように供給されているのかを現地で聞いてみた。飲み水については首都のマアレからミネラルウォーターで供給されているようだが、シャワーなどの水は井戸水を利用する。ところが小さな島国であるから、井戸を掘っても海水しか湧き上がらない。モルディブの水道水は、雨水をろ過したものや海水を脱塩したものが一般的であるが、大きな島の場合は、海水淡水化装置が導入されていた。



すでに日本の大手の海水淡水化メーカーがモルディブ市場に装置を供給しているが、今後はさらに大型の本格的な海水淡水化装置を導入することになるだろう。実はこれらの装置には腐食に強い日本のチタンを大量に使用するので、現在の海水淡水化装置は太陽光発電や波力発電を利用した設備を設置して海水を淡水化するプロジェクトになっている。日本の技術で再生可能エネルギーと海水淡水化装置をモルディブ以外にも出荷すれば、日本のチタン産業も世界中の島嶼に貢献できるというものだ。

1月には、東邦チタニウムがサウジアラビアにスポンジチタン工場を合併で設立すると発表した。これは大変な話で、アラブ全域の海水淡水化装置や化学プラントを意識した合弁だ。日本のチタン産業がグローバルシフトを敷いたということでもある。モルディブ以外に水ビジネスが期待できる島は山ほどある。趣味と実益を兼ねてセール、フィジー、トンガ、パラオ、タヒチ島やカリブの島々にも行ってみたい。

〔なかもら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンスドマテリアルジャパン（AMI）社長。新著に「レアメタルハンター・中村繁夫のあなただの仕事に成功に導く「山師の兵法A to Z」」（ウェッジ）。